『いなか医師』における「新しい女性」

相　本　資　子

つい最近まで，アメリカの女流作家たちの作品は，ごく一部を除いて，無視され続け，文学史の“canon”からは排除されていた。なぜなら，それらは，ニーナ・ベイムの言う，「悩める男性のメロドラマ」のパターンに合致していないからであった。ニーナ・ベイムは，アメリカ小説の“canon”は，白人男性社会によって作られたもので，「現実の社会的環境は無視して…本質的で理想化されたアメリカ人の特徴をつかむような物語で，非リアリスティックな物語，つまりロマンスである」と説明している。この“canon”となる多くの小説は，「アメリカの神話」を描いていて，「特殊な社会的環境から切り離された純粋な自己を持つ個人が，アメリカという理想によって与えられた約束に直面する」物語である。それは非常にロマンティックな約束であって，「この新しいアメリカという土地で，歴史や社会的出来事によって妨害されることなく，個人は，完全な自己定義を得ることができる」[1]のである。つまり重要なアメリカ小説は，白人男性作家によって書かれ，アメリカン・アダムが社会と戦う白人男性中心的な世界を描いたものであったのだ。

当然，これから取り上げるセアラ・オーン・ジュエットも，白人男性中心の世界を描き出していない女性作家という点で，日の目を見なかった作家の一人であった。いままでのジュエットは，地方色豊かな作品を発表した作家として評価されることが多かった。「アメリカ合衆国の別の地方とか，世界の別の地域からやって来て，ニューイングランドを理解したいと思う人が，セアラ・オーン・ジュエットの小説からとりかかるのはもっともなことだ」という書き出しで，マーガレット・F・ソープは，ジュエット論を始めている。とくにジュエットは，「義務感，独立心，勇気，忍耐，仕事にたいする喜び，尊大な道

徳心」[3] といったニューイングランド人の特徴を描いている，とソープは指摘している。エイミー・キャプランが，地方色文学を説明するのに，「現代の都会人」は，「彼らの生活を形作っている歴史的変化に無関係な，原初的な，確かな空間を，土地の人たちに投影している」[3] と述べているように，都会の読者が安らぎを求めるための，ノスタルジックな空間としてのニューイングランドを描いた作家として，ジュエットは評価されていたのである。

いずれにしてもこれまでのジュエットは，アメリカ文学やアメリカ文化の主流とはほど遠い，周辺的な作家と見られていたことには，間違いない。ところが最近になって，“canon”の崩壊と共に，ジュエットが再評価され始めている。女流文学や地方色文学が，複数文化の一つのあらわれとして，認められ始めた現在，白人男性中心の文化に対抗する「反文化」を描き出した作家の一人として，とくにフェミニストたちによって見直されているのである。たとえば，スーザン・K・ハリスは，ジュエットの作品には，「活動的で冷静沈着で，政治的な意識が高い女性」や「世界と自分自身の向上心といった角度から自分が規定されることを積極的に求める女性」，さらには「意義のある，実際的な仕事」につく女性などが登場している，と説明している。また，ジュエットは「父権社会的な歴史の物語」を「挑戦的な女性の語り」として書き直したと主張するヘレン・F・レヴィは，この作家が「男性社会への主人公の進出と，そこでの勝利」を描いているだけでなく，「競争や個人への強調，自我を社会や自然の風景に押し付けようとするアメリカの夢」に疑問を投げかけ，「救われることのない男性中心な神話と女性の役割との不毛性」を描いているとして，高く評価している[4]。

『いなか医師』は，ジュエットには珍しい長編小説の一つで，1884年に発表された作品である。登場人物は，ほとんどが女性で，男性は登場しても影が薄い。ヒロインのナン・プリンスが，まだ幼少のころ，母のアデラインに連れられて，祖母のサッチャー夫人の家に帰ってくる場面から小説は始まっている。アデラインは，着の身着のまま，息も絶え絶えで，途中，川岸を歩いているときには，川に身を投げることも考えるほど，身も心も疲れはてて，やっとのこ

とで実家にたどり着く。しかしその後すぐに，アデラインは死に，ナンは，祖母によって育てられることになるが，その祖母も死んでしまった後は，村の開業医，レズリー先生に引き取られる。先生の往診について馬車に乗って村中を回るうちに，先生のような医者になりたいと思い始める。ナンが医学生のときに，父方の叔母，ミス・プリンスの屋敷に滞在する機会が与えられ，そのとき，ジョージ・ゲリーという青年弁護士と知り合う。互いに心引かれ，同世代の女友達や，まわりの年輩の女性達からも，女は結婚するものだと勧められるが，結局，ナンは結婚を捨てて職業を選ぶ。医学校を卒業すると，レズリー先生の元へ帰り，村のいなか医師として生きる。

この筋立てから考えると，この小説は女性の自立，結婚しない女性，職業をもつ女性，などいかにもフェミニストたちによって高く評価されそうなテーマにあふれた物語である。しかしこれは，はたして本当に，手放しで賞賛するに値する作品なのだろうか。白人男性中心の文化に対抗する「反文化」を提供し，「男性中心的な神話」の不毛性を暗示していると言えるのだろうか。

たしかにこの小説は，「家」から解放された女性を描いている。19世紀の白人男性中心社会の価値観においては，女性は外のマーケット的世界に出てはならず，家の中で家事をし，子供を育て，家を守る存在であった。女性は「家庭のなかの人質」となり，「『信心深さ，純潔，従順，家庭的であること』を特徴とする真の女性らしさを崇拝していた」。「家庭」は「女性特有の世界」[5] となったのである。これらの価値観は，『いなか医師』のなかでは，グレアム夫人，フレイリー夫人，ジョージ・ゲリーなどの登場人物たちのナンに対する考えに表れている。

グレアム夫人は，ナンに向かって「小さな貴夫人のように見えるようにしなくてはならない」[6] とか「社会のなかの自分にふさわしい場所に自分を合わさなければならない」(134) と語り，自由奔放に育ってきたナンが，ともすれば社会の枠からはみでそうになることを心配している。またフレイリー夫人は，「女性にふさわしい場所は家庭だ」(282) とはっきり断言し，医者になりたいと考えているナンに懇々と諭すのであった。「若い女性は家事に興味を示すこ

とが適当であると考えられていた」(278) とか，「意志の強い女性は場違いで嫌われる」(279) という彼女は，「社会に貢献するもっとも良い方法は，自分の家を片付け，夫を幸せにし，自分のできる範囲の社会的責任を果たすことである。アメリカの母親は，すでに十分な権利と義務を持っており，彼女たちの家庭より遠くを見る必要はない…」という意見の持ち主であった。ジョージ・ゲリーは，将来有望の青年弁護士であるが，19世紀の白人男性中心社会の規準や道徳や礼儀を大切に考えている。ナンに心ひかれ，結婚を考えているが，医者になろうというナンの考えは間違っていると思い，それを認めようとしない。「もし，すべての女性が家事の能力を身につけてさえいれば，世の中は非常に住みやすくなるだろうに」(259) と考えている。肩の骨がはずれて苦しんでいる男の人をナンが直してやる，というエピソードが紹介されるが，女のナンの方が男の自分よりも能力があるということを見せつけられたジョージは，とても不快に感じるのである。

この白人男性中心の価値観に捕らわれている女性が，ミス・プリンスとミス・フレイリーである，というと矛盾していると思われるかもしれない。というのは，ミス・プリンスは，一生独身で過ごす女性だからである。しかし，なぜ独身でいるかというと，つまらぬ誤解から別れた恋人に忠実であろうとしているからであった。その恋人も若くして死んでしまい，あとに残された子供がジョージである。ミス・プリンスが彼のことをたいへん可愛がって，プリンス家の後継者にすることを考えていたほどである。このことからも，彼女が独身で一生過ごしているのは，かつての恋人に対する献身ぶりの現われであることがわかる。このミス・プリンスの態度は，白人男性中心の文化によって作られた女性のそれだと言える。結婚して，自分の子供を育てているわけではないが，ミス・プリンスの関心があることといえば，プリンス家の伝統を絶やさないことであり，プリンス家の「家」を変化させずに守っていくことであり，白人男性中心社会の規準を大切にする青年，ジョージを育てることであった。ミス・プリンスは「ほとんど変わらないので，彼女の友人はしばしば彼女の永続的な若さをほめたたえる」(196) とか，「ミス・プリンスは自尊心があり，威厳の

ある，ニューイングランドの古いタイプの女性であった」(197) という表現は，ミス・プリンスが白人男性中心主義の伝統的価値を守り続ける古い考えを持つ女性であることを示している。

さらに，ミス・プリンスは，何より彼女の古い「家」に執着している。「彼女は，彼女の古い家をこよなく愛し，誇りにさえ思っている。そしていつもそれを細細と管理することに気を使っている」(198) のである。彼女の「家」が少しでも変化することを嫌うミス・プリンスは，古い立派なマホガニーの家具をもとの場所に置いたままである。「もしミス・プリンスのおばあさんが，あの世からダンポートの町にもどってくることができたとしても，家の様子がまったく変わっていないので，この世の家を一日と離れていたなんて信じられなかっただろう」(200) とジュエットは書いている。まるで「玄関のノッカー」(204) のように「家」にくっついて「家」を守り続けてきたミス・プリンスも，白人男性中心社会における「家庭のなかの人質」となった人物である，と言えるだろう。

ミス・フレイリーは，「女性にふさわしい場所は家庭だ」と断言している母親のフレイリー夫人に育てられた娘なので，当然，幸せな結婚をし，夫につくし，「家庭」を守り，子供を育てることだけが女の一生であると教えられてきている。その結果，「どんな状況においても，分別があり，古風な趣のあるもの以外のものを見るのは，彼女にとって不可能であった」(303) だけでなく，「母がいないと途方にくれてしまう」(299) と彼女自身が言うほど，ミス・フレイリーの生活は，フレイリー夫人の持つ白人男性中心主義の伝統的な価値観に完全に支配されているのである。

こうしたミス・プリンスやミス・フレイリーに見られる，「家」や「家庭」に閉じこもる生活は，「庭」や「植物」のイメージで表現されている。ミス・プリンスの庭は「家の後ろにあって，通りからはうまく守られている」(224) し，ミス・フレイリーは，「室内用鉢植えの植物」(303) にたとえられている。このような外部から何者も侵入してくることのない安全な「庭」や部屋のなかでぬくぬくと保護された「植物」は，19世紀のアメリカにおける「家庭」が外界から遮断された幸せな空間と考えられていたことを示している。ところが，

ここで忘れてはならないのは，ジュエットの描写が彼女らの平和で安泰な生活を示すだけに留まっていないということである。「ミス・プリンスの生活がどんなに寂しいものであったか，彼女の親友でさえ知らなかった」(197) とか，「明らかに彼女は，彼女の自由と支配を楽しんでいたにもかかわらず，彼女の家は荒れはて，空虚であった」(206) という表現によって，ミス・プリンスは本当は幸せからほど遠い状態であったことが暗示されている。さらに，ミス・フレイリーの白人男性中心社会の価値観に縛られた生活については，それが「牢屋」(303) に入れられたようなものであり，「奴隷」(304) の生活であった，とジュエットは説明している。どちらの女性の場合も，「家庭」がけっして幸せな空間ではなかったという事実を，読者は理解することができるのである。

このジュエットの考えは，もっとはっきりした形で『いなか教師』のヒロインのナンの生き方のなかに見ることができる。ナンは結婚よりも医者という職業を選び，夫につくすことも，家を守ることも，子供を育てることもしない。「家庭」からまったく解放された女性としてのナンは，白人男性中心主義の価値観を真っ向から否定した女性として描かれている。「男や女が，あのような自己依存と不自然な自力本願をもっているときには，ごく早い時期にそれらが現れる」(137) とレズリー先生が言うように，ナンは小さいときから，独立心の強い子供であった。結婚し，「家庭」を築くことだけを期待される女性であることがはがゆくて，「男の人のように，仕事の訓練を受けることさえできればいいのに」(164) と思う彼女は，世の中のためになりたいと切望するのであった。「彼女の他の多くの友人にはある，結婚に対する自然な本能や，楽しい家庭生活を築き，維持していく考えは，彼女には無縁のものであった」(159)。それゆえに，一度はジョージに心引かれるが，結局ジョージとの結婚よりも仕事を選ぶのだった。「私のすべてが彼の愛と彼の妻になることを望んでいたわけではない。……世間の同情と伝統は彼の味方であることを私は知っている。でも，彼の妻になり，ダンポートに住み，彼の家を切盛りすることより，何千倍もよいことを，私は，期待することができる」(321) と考えるナンは，決して結婚しないことを決心するのだった。このように「家庭」や伝統という「牢

屋」から解放された女性としてのナンは，「文明の新しい利点やある高貴な進歩の，ごく初期の証拠あるいは実例の一つになるだろう」(332) というレズリー先生の言葉に表われているように，「新しい女性」の一人として描かれている，と言えるかもしれない。その意味で，この作品は，「家庭」の外に出て男性のマーケットの世界へ進出していく女性を描いた革命的な作品であり，フェミニストたちから絶賛されるのも，当然のことであると思われる。

もちろん，1880年代のはじめに，幸せな結婚をとるか，それとも医者という職業を持った女性として生きるか，という二者択一を迫られた若い女性を主人公として登場させたということは，注目すべき文学的事件であったことは否定できない。そこにジュエットという作家の現代性を認めなければならないことは言うまでもない。しかし，この『いなか医師』という作品は，はたしてフェミニスト的立場から解釈するだけで十分なのだろうか。この問題を考えるために，あらためてナンの生き方を考え直してみることにしたい。ナンは小説の冒頭から，父にも母にも死に別れ，さらには，引き取ってくれた祖母にも死なれ，孤児として登場する。その孤児ナンが，レズリー先生の往診について行く間に様々なことを学び，さらに医学校でも猛烈に勉強し，ついには医者になるまでの半生を描いているという意味で，この小説は一種の「成功物語」であり，ナンがセルフ・メイド・ウーマンであることは否定できない。ジュエットは，それまでに多く書かれた，セルフ・メイド・マンの「成功物語」の女性版を書き上げたことになる。したがって，ナンをキャザーの『おお，開拓者よ』(1913) に登場するアレグザンドラと並べて論じる批評家がいるとしても少しも不思議ではない[7]。ジョン・カウェルティは，「アメリカ人はつねに，世界のうちでもっとも熱狂的なセルフ・メイド・マンの支持者である。多くの人は今だに，セルフ・メイド・マンはアメリカの発明であるだけでなく，ユニークな国産物であると信じている」と述べ，これは一つの「神話」であると論じているが[8]，セルフ・メイド・ウーマンの登場する『いなか医師』は，きわめてアメリカ的な物語だと考えることができるだろう。

この作品のアメリカ性は，ナンと自然との関わりのなかにも見つけ出すこと

ができる。小説の前半は，ニューイングランドの片田舎にあるオールドフィールズを中心にして展開される。ここは，その名のとおり，昔ながらの古い町で，「古い伝統」が生き残った「旧式な町」(119) と形容され，都会のような競争はまったくなくて，「同じくらいの大きさの田舎町にくらべると，ほとんど変化がなかった」(155) とも説明されている。そこに住んでいる人も昔のままの変化のない生活を好み，重いマホガニーの家具や古い肖像画や古風な趣のある装飾品に囲まれて暮らしている。オールドフィールズは，時や変化の入り込まない幸せな田舎町として描かれているが，このことは，ナンが小説の後半において，叔母のミス・プリンスの家があるダンポートという大きな町に滞在したとき，「社会の複雑さ」(258) を経験し，早くオールドフィールズに帰りたいと思う場面によって，さらに強調されている。

このような何の変化もない，時間の止まったような田舎町オールドフィールズでのナンの生活を描写するにあたって，ジュエットは彼女と自然との結び付きにとりわけ重点を置いている。美しい自然のなかで動物や草花と戯れながら自然児のように育ったために，「うっとりとして見ている目の前にやさしく広がる草原や野原以外には，彼女にあたえられた楽しみはなかった」(50) というのである。アネモネの花が風に揺れているのを見つめたり，青空を見上げて，カモメやスズメやカラスが舞遊ぶのを眺めたりしているナンの姿が描かれているだけでなく，彼女自身が「どんな田舎の子供よりもずっと土の子供」であって，「植物が生育するように自然に成長した」(102) とも書かれている。ナンはまた「花」にもたとえられていて，「大空の下で何の恐れもなしに芽を吹き，太陽と風と夏の雨だけに教えられ，運命を実現する力を貸してもらう，なにか柔かい野生のもの」(303) といった表現は，彼女がまったく自由に，自然そのもののように育った幸福な女性であることを物語っている。「若さ」や「健康」(155, 303) のイメージで描かれた彼女はまた，いつかお城の女王様になるといった白昼夢にふける，夢見る乙女であった。「彼女は単純無垢な人間なので，この世のなかの本当の危険や危機に気付いていなかった」(48) ともジュエットは説明している。

こうした時間や変化のうずまく複雑な外の世界を知らずに，自然のなかで自由奔放に育ったために，ナンは学校の窮屈な規則，とくに学校の鐘が嫌いで，学校の生活パターンに自分を合わせることができなかった。学校の鐘は，時間やスケジュールと密接に関わっているので，時間の入り込むことのない自然の世界に住み慣れたナンが，違和感をおぼえるのも当然であったかもしれない。また，祖母のサッチャー夫人が死んだとき，過去に戻りたい，いつまでもずっと子供でいたい，という思いにとらわれる。「振り返って見ると，過去は安全で，快適であったが，いまの彼女は，つむじ風のように彼女の上を吹き抜けて，すべてを変化させずにはおかない何かとともに始まった運命的な未来に支配されていた。こうした状態はこれからずっと続くだけでなく，成長するということは悲しみと不安にさらされるということであるように思われた」(80) というのである。これは祖母の死という形をとって現れた「本当の危険や危機」に直面した瞬間にナンが示した拒絶反応であったが，それは逆に彼女が人間世界に存在する「悲しみと不安」をまったく経験したことがなかったことを示している。それはまた，彼女が人々の生活から病気という「悲しみや不安」を取り除く医者になるという，その後の物語の展開を暗示していると言えるかもしれない。

ここまで考えてくると，昔のままの姿をとどめているオールドフィールズで，悲しみや苦しみに目を閉ざし，時間や変化を締め出して，単純で幸せで無垢な自然児としての生活を送っていたナンは，楽園喪失以前のアメリカン・アダムならぬ，アメリカン・イヴであった，と断言することができるだろう。この時間や変化を否定するアメリカン・イヴとしてのナンの姿は，この小説の他にも見つけることができる。

『いなか医師』には，何度か「川」の場面が登場する。この「川」は，オールドフィールズのサッチャー夫人の家の近くを流れる「川」で，ナンにとっては，幼い子供の頃の遊び場であった。何か悩みごとや嫌なことがあるとナンは必ずここにやって来た。「あたかも，新しい生命と幸福に満たされるかのように，彼女は急いで川岸へ走っていった」(167)。医者になる勉強をする決心をするのもこの川岸であったし，小説の最後もこの「川」の場面で終っている。

そこでのナンは，自分の医者としての明るい未来を神に感謝し，しみじみと幸福にひたっているのである。また，ダンポートに滞在中に，川に遊びに行ったことがあったが，そのときもナンは，自然のなかで過ごした子供の頃を思いだして，幸せに感じるのだった。つまり，ナンにとっての「川」は，時間や変化のない自然のなかで幸福に暮らしていた子供時代と密接に結びついている場所，「新しい生命と幸福」を与えてくれる場所であった。別の言葉で言うと，ナンが時間や変化から逃れて，アメリカン・イヴでいられる場所である，ということになる。

しかし，この「川」もまた，決して時間や変化を逃れることのできる世界ではなかった，ということを忘れてはならない。すでに触れたように，小説の冒頭で，ナンを連れた母親が，足を引きずりながら実家にたどり着こうとしていたとき，心身共に疲れはてて，この「川」へ身を投げようとしたことがあったが，このエピソードは，「死」という形をとって時間が「川」にしのびよっていたことを物語っている。さらに，ナンがジョージとの結婚か医者としての職業かという選択を迫られた場所も，「川」であった。結婚は，性や出産と直接結びついているという意味で，ここにもサイクルとしての時間やそれがもたらす変化の誘惑が待っていたのである。もともと「川」は，「時間の流れ」と結びつけられて考えられてきた。(『いなか医師』と同じ年に出版された，マーク・トウェインの『ハックルベリー＝フィンの冒険』を思いだしてもらってもよい。)この小説においても，死や性や結婚と切り離せない時間や変化が，ナンのまわりに存在している。しかしながら，アメリカン・イヴとしてのナンは，その時間や変化をきっぱりと否定し，「新しい生命と幸福」で満ちている場所に変えてしまったのである。

さらに，ナンの選んだ医者という職業も時間の否定と深い関係をもっている，と言えるのではないか。医者は，病気，苦しみ，死から人々を救うのが仕事である。「…私は，一つでなく多くの家庭を幸せにするために，私のやり方で私の役目をはたさねばならない。人々を苦しみから自由にし，大人や子供の体を弱さや醜さから自由にしてやるのよ」(327) とナンは言う。医者は神か

ら与えられた「癒す才能」(342) をもっているのだ。レズリー先生によると，健康な人間は「自然」の状態にあり，病気に犯されると「自然」が損なわれるのである。だから，医者は病人を回復させるために自然を助けねばならない。いずれにしても，医者の仕事は，苦しみ，病気，死などの時間や変化の世界から人々を救いだし，幸福で自由な「自然」の状態に回復させることである。悲しい病気から解放された世界をナンは夢見ている，と言ってよいだろう。

ジュエットはまた，医者とキリストとを結び付けて描いている。「キリストが彼の 仕事についたように，彼女は，彼女の 仕事についた…」(340)。そして，「キリストの名のもとに，足の悪い人や体に障害のある人，目の不自由な人を，精心的なことで助けた」(342)。ナンには「神から与えられた才能」(347) があり，「より神聖なもの」の近くにいて，「神の使者の声」(328) を聞いていた，とジュエットは説明し，ナンを一種の聖女として描写することで，医者という職業が，日常的な時間や変化の世界のなかに閉じ込められた人々を救済する仕事であることを強調している。医者としてのナンという設定は，彼女がアメリカ社会を支えてきた無限の進歩という神話の信奉者であったことを裏付けていると言ってもよいだろう。

デイヴィッド・W・ノーブルは，アメリカの中心的神話を「時間の超越」と規定して，「アメリカはヨーロッパの国々と違って，自然との時間のない調和を保って暮らすために，アメリカ人を歴史的変化という恐怖から逃れてきた選民とするという契約をもっている」[9]と書いていた。結局のところ，時間や変化のない自然のなかで育ち，「川」に安らぎを求め，医者として，人々を時間や変化の世界から救い出すナンは，実は，きわめてアメリカ的な衝動をもった女性であり，白人男性社会を特徴づけるアメリカの夢，あるいはアメリカの神話にとりつかれた人物であることが判明する。

以上のように，『いなか医師』という小説は，セルフ・メイド・ウーマンの成功というアメリカの神話として読むことができる。あるいは，これをアメリカン・イヴが時間を否定することによって，人々に救済と幸福をもたらすという形で，アメリカ人が憧れる神話的世界を実現する物語と呼ぶこともできる。

いずれにしても，この作品がきわめて神話的な性格を備えていることは否定できない。ニーナ・ベイムは「女性作家による多くの小説は，われわれが述べている特別な神話の一つの型を表していて，その主人公は女性になっている。」[10]と論じているが，ここでいう「特別な神話」とは，アメリカン・アダムという個人が社会と戦う白人男性中心の世界を描いたアメリカの神話を意味している。他方，ヘレン・F・レヴィは「女性作家たちは，主人公の性別を女性に変え，セルフ・メイド・マンのパターンを女性の言葉で書き改めることによって，ごく自然にアメリカの読者の関心を引こうとした」だけでなく，「男性に支配された大規模な社会構造の支配的なディスコースによって生み出された個人主義的な小説の戦略を取り入れていた」[11]と説明している。レヴィがジュエットを激賞していることはすでに指摘しておいたが，すくなくとも『いなか医師』におけるジュエットは，レヴィやベイムによって批判されているようなタイプの女性作家の一人にほかならないことが判明する。ナンの物語は主人公が女性であるというだけで，その基本的なテーマや筋立ては白人男性中心の神話的な世界を肯定しているにすぎないのである[12]。

この小説をフェミニズムの批評家たちが絶賛したのは，そこに「家庭」から解放されて，その外にある男性の世界に立ち向って行く自立した「新しい女性」が描かれていたからであった。一見したところ，たしかに，ナンの生活と意見は白人男性によって支配された父権社会の価値観の崩壊を暗示しているかに思われるが，そのきわめて神話的な性格に注目するとき，『いなか医師』はニーナ・ベイムのいわゆる「悩める男性のメロドラマ」の主人公を女性に置き換えただけであって，そこに描かれている伝統的なアメリカ社会の基本構造には，何の変化も起こっていないことが明らかになってくる。秩序あるアメリカ社会を希求する白人男性によって閉じ込められた「家庭」を，もっともふさわしい世界として守りつづけてきた女性が，19世紀末になって「家庭」から外の世界へ進出するようになるけれども，ジュエットの小説に登場する主人公は，「家庭」から解放されるにもかかわらず，結局は，その外に存在する男性社会から「悲しみや不安」を排除することをめざす救済者になってしまっている。

「家庭」を支配していた価値を，そのまま外の世界に持ち込む結果になっている，と言い換えてもよいだろう。

「1865年以降，多くの中産階級の女性は，彼女たちの家庭の純粋さが夫たちの堕落したマーケット的世界における救済力になることを要求し始めた」[13] とD・W・ノーブルは論じているが，『いなか医師』に描かれた世紀転換期の聖女としての女性は，医者として活躍することによって「時間の超越」を実現し，堕落したアメリカ社会を救済しようとしている。その意味で，ジュエットの小説は，19世紀末における男性社会の価値観の崩壊やその不毛性を批判しているかに見えるけれども，最終的には，むしろその価値観を肯定している，と結論しなければならないのである。

註

(1) Nina Baym, *Feminism and American Literary History* (New Brunswick : Rutgers University Press, 1992), 10-11.

(2) Margaret F. Thorp, *Sarah Orne Jewett* (Minneapolis : University of Minnesota Press, 1966), 5.

(3) Amy Kaplan, "Nation, Region, and Empire," *The Columbia History of the American Novel*, ed. Emory Elliott (New York : Columbia University Press, 1991), 252.

(4) Susan K. Harris, *19th-Century American Women's Novels* (New York : Cambridge University Press, 1990), 201, 210 ; Helen F. Levy, *Fiction of the Home Place* (Jackson : University Press of Mississippi, 1992), 9, 62, 63.

(5) Sarah W. Sherman, *Sarah Orne Jesett, an American Persephone* (Hanover : University Press of New England, 1989), 6, 7.

(6) Sarah Orne Jewett, *A Country Docter* (1884 ; rpt. New York : Garrett Press, Inc., 1970), 129. 以上『いなか医師』からの引用頁数は（ ）の数字で示す。

(7) Susan K. Harris は，*19th-Century American Women's Novels* の最終章でアレグザンドラとナンを並べて論じている。

(8) Jonh G. Cawelti, *Apostles of the Self-made Man* (Chicago : The University of Chicago Press, 1965), vii.

(9) David W. Noble, *The Eternal Adam and the New World Garden : The Central Myth in the American Novel Since* 1830 (New York : George Braziller, Inc., 1968), ix.

(10) Baym 14.

(11) Levy 20.

(12) 同じような運命をたどった女性として，エレン・グラスゴーの書いた『不毛の土地』のドリンダを思い浮かべることができるが，『不毛の土地』にみられるアイロニカルな視点は，ジュエットの『いなか医師』にはみられない。拙稿「『不毛の土地』の不毛性——エレン・グラスゴーのアメリカ的主題をめぐって」*The Edgewood Review* 第9号（神戸女学院大学大学院，1982）参照。

(13) D. W. Noble, *The Progressive Mind 1890-1917* Revised Edition (Minneapolis: Burgess Publishing Company, 1981), 82.

——大学院研究員——